KSKQ 第三種郵便物認可ＫＳＫＱ（サロン・あべの）通巻７２号１９９２年 1月18日

サロン あべの

出会い ふれあい 助け合い

NO 67

十二月の出会い

快い小春日和の平成三年十二月七日（土）午後一時～四時、育徳園三階幸分ホールで〈サロン・あべの〉のクリスマスが、あべのボランティア・ビューローの「ボランティアの集い」グループからの参加も得て開かれた。

毎年狭いおもいをおかけしていたが、今年は広いホールでゆったりとくつろいでいただきながらお楽しみ下さい…と。司会者が挨拶。「ジングルベルが聴こえたら 今年もＨＡＰＰＹ ＸＭＡＳ！」の始まりである。

松本孝氏の音頭で乾杯のあと、アメリカからの留学生四人とのふれあいトーク。在日期間が七ヶ月～一年九ヶ月と短いが、確かな日本語で出身地のユタ・ネバダ・バージニア州等のこと、家族のこと、アメリカの家庭のクリスマスのこと…等。ささやかな民間外交（？）

毎月十二回（二・四・六・八の日）発行 一九九一年九月三日第三種郵便物認可

を展開。

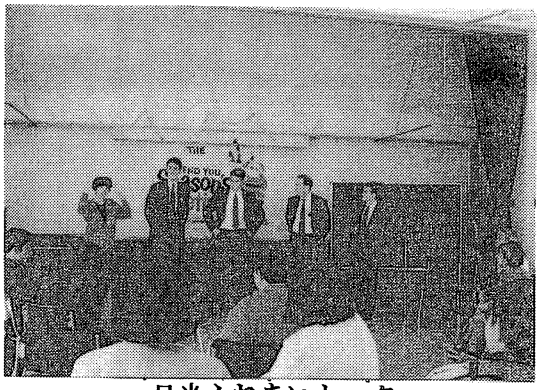
つづいて、あべのボランティア・ビューローの吉岡さんによるゲーム。

最初はクイズ式で問題が読まれて、全員が参加して「○とＸ」で答を出して、勝ち残っていくもの。

答は簡単に出せるが思いちがいや早トチリもあって最後迄残るのはなかなかに難しい。

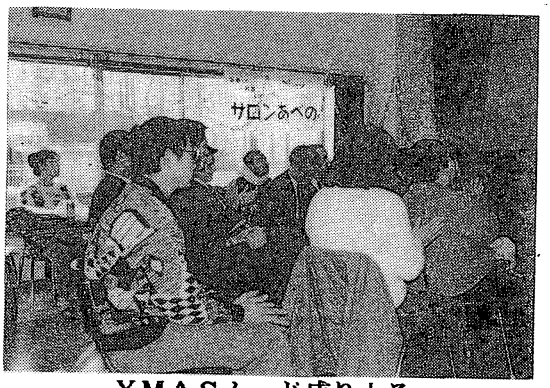
二番目は、頭を空っぽにして、ただただ運を天にまかせて、吉岡さんに勝ち抜いていくジャンケン大会。こちらも最後迄残るには、それ相応の運が必要で、熱のこもったゲームとなった。これらの優勝者には、この日の為にと寄贈された、和紙で手作りの昔の娘姿立人形が贈られた。

そして、本日のメインプログラム「アンサンブル　ひまわり」六名による演奏が三時より始まった。初めに「コンドルは飛んでいく」「夜霧のしのび逢い」の二曲が会場にひろがる。次ぎに全員で「聖

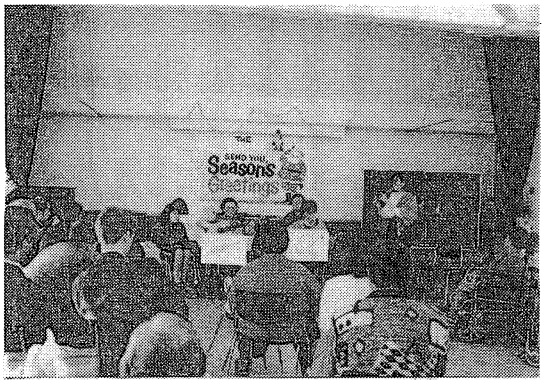


日米ふれあいトーク

じゃんけん　ホイッ



ＸＭＡＳムード盛り上る



「アンサンブルひまわり」の演奏にうっとり

みんなで手話コーラス

夜」と「ジングルベル」を声高らかに歌った後、一転してギター独奏の「禁じられた遊び」とタンゴの「ラ・クンパルシーター」が奏でられた。最後は、リコーダー独奏によるウィルアルバレル作のコンチェルトの一部を、澄んだのびやかな音色で会場はうっとり。

つぎなるプログラムは、旭・前田・吉岡さんの三美人による手話コーラスで「手のひらを太陽に」と「赤鼻のトナカイ」が歌われた。

この後、旭さんの指導でこの二曲を全員が手ぶり身ぶりも愉しく合唱して、リラックスしたクリスマス気分を楽しむ中を車椅子に乗った上平氏粉するサンタのおじさんが登場。参加者一人一人にプレゼントが渡され、今年もＨＡＰＰＹ　ＸＭＡＳはクライマックスに。曲はジングルベルから蛍の光に変り、次ぎの出会いを約して散会。

この日の参加者五二名。司会は石田　律氏、手話通訳は旭　純子さん。

クリスマスによせて

河合恵子

ここ数年来、クリスマスといえば、サロン・あべののクリスマス。十二月に入って初めの土曜日のこの集まりは年々参加者も増えて盛大になってきましたね。そしてクリスマスは子供たちにとってお年玉やお誕生日とともにプレゼントが貰える待ち遠しい日。「大草原の小さな家」のなかでもクッキーとミルクをサンタクロースのために用意してひたすらプレゼントを待つ男の子がいました。また、最近ＴＶ放映された「三人のゴースト」は「クリスマスキャロル」の現代版パロディ。小学生のころ読んだオルコットの「若草物語」の冒頭には四人姉妹がお母さんにどんなプレゼントを贈ろうかと相談する場面やクリスマスの日、自ら朝食を病人のいるへ運ぶシーンがあったように思います。そしてＯ・ヘンリーの短編「賢者の贈物」ではお互いに思いやりすぎて、かえってすぐに役立たないけれど心のこもったプレゼントをかわす素敵なカップルが登場する。

このようにクリスマスを舞台にした作品が生まれるのもキリスト生誕という特別の日だからというだけでなく、北半球では一年で最も夜の長い寒い頃、（今年の冬至は十二月二十二日でした）灯火のまわりで心を暖め合いながら、本当に大切なものについて考えるからではないかしら。バブルがはじけ、ソ連の名が消え、「崩壊」の年だったとＴＶが告げる年の終わり、以前読んだ物語を懐かしく思い出しています。

ボランティア活動交流会

「今、共感と連帯の活動めざして」と題して、平成三年十二月十日（火）午前十時～午後三時四十分、大阪府教育会館へたかつガーデン＞（大阪市天王寺区東高津町７－十一）で、大阪市社会福祉協議会（大阪市ボランティア・センター）主催の「ボランティア活動交流会」が開催されました。

午前の部は、沢田清方氏（日本福祉大学助教授）による「福祉の町づくりとボランティア」の講演。

沢田氏が地元で今までに取り組んでこられた入浴ボランティア活動と、それに伴って見えてきた地域の在宅老人の実態と対応についての話と、デンマークで体験された重度障害を持つ一人暮しの老人に対する各種の福祉援助等について、スライドを使っての話。ボランティアは「何をしてあげましょうか」ではなく「何が出来ますか」との問いから、その人の残存機能を生かし「本当に必要で出来ない事を援助」していき、その中から見えてくるその人の可能性を広げていく手伝いをする。それが人的なものであるか、物理的な物（自助具や室内の改造等）であるかを見つけて、専門家への橋渡し役にもなって欲しいと言われた。

「すべての人がふつうの状態で、自立できた状態がノーマル（ふつう）。自立とは『自分が自分である』こと」が出来る生活を援助の原則にしているデンマークでは、重度障害を持った老人が安心して一人で地域生活が出来る福祉施策がとられている。

日本では、まだ「家」意識が家族や当事者に強く、世間体という壁が立ちはだかっているので人間本来の「自立」がさえぎられている。ボランティアは、助け合いの実践をしつつ福祉課題の早期発見と福祉情報や活用を当事者に徹底させて、当事者の自主活動を支えていけるネットワーク作りが大切と話された。

午後からは、四分科会とパネルディスカッションが行われた。

一、分科会（事例発表・交流）

①老人を援助する活動（在宅援助）

②老人を援助する活動（老人食事サービス・友愛訪問活動）

③障害者を援助する活動

④児童・障害児（親）を援助する活動

二、パネルディスカッション

「福祉の町づくりをすすめるために」のタイトルで、上野谷加代子氏（桃山学院大学教授）の進行で助言を受けながら各パネラーが事例を発表した。

○個人活動として、

穴沢一良氏（大阪市ボランティア・センター登録ボランティア）が職業（大阪職業短期大学校デザイン科）を生かして製作される「物作り（自助具や補助具等）を通し

てのボランティア活動」の事例を、スライドを映しながら発表。

○グループ活動として、

＜サロン・あべの＞の「出会い・ふれあい・助け合い」のモットーを設立の過程・趣旨、そして今迄のサロン運営と活動について冨田慶子氏が発表。

○地区社協活動として

東住吉区今川社会福祉協議会ボランティア部の中井泰子氏が婦人活動から生れたボランティア部のあゆみとこれからを「ボランティア活動の展開から、福祉の町づくりへ」と題して発表。

○区社協活動として

東淀川区社会福祉協議会会長の小林俊壹氏が「東淀川区における福祉の町づくり」を区社協の立場から、ボランティア活動の活性化を図る為のボランティアスクール開校とボランティア・ビューローの設置等についての経過とこれからについて発表。

各人の発表後、質疑応答があり、上野谷氏から助言や補足説明を受けた。氏はボランティアは行政と連帯をするのではなく、常にニード者と共感しながら活動し、物が言えるシステムを持つことが大切と言われた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ボランティア募集！

あなたのパワー　待ってま～す

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

なんでもハンズでは下記の内容で「しあわせの村」への一泊旅行を企画・準備中です。多くの方に参加していただきたく、まずはボランティア下さる皆様方にご案内させていただきます。又、障害者の皆様は予定にいれておいて下さるよう、お願いします。

記

日　時；92,4,4（土）～5(日)

集合と；市身体障害者スポーツセ

解散　　ンター（ﾘﾌﾄﾊﾞｽ 利用）

宿　泊；神戸「しあわせの村」内

『保養センターひよどり』

参加費；介助者￥８０００．

；障害者￥１００００．

（１泊２食付）

問合わせ先；「なんでもﾊﾝｽﾞ」南光方

☎０６－６９３－２３６７

アフター石川国体

浜　本　浩　喜

昨年の十月二六～二七日に開催された第二七回全国身体障害者スポーツ大会「ほほえみの石川大会」に大阪代表として参加した僕は、大会開催の花火の音を聞いたとたんから閉会式の終わるまで、言葉で言い現せない感動の渦にまきこまれてしまった。

その為とは言わないが、競技じたいは二種目とも負けてしまい悔しかったけれど、この大会に出場出来て本当に良かったと想っている。それは、二日間僕達のお世話をして下さった七人のコンパニオンの人達に出会えたことが一番の収穫。コンパニオンの人達も「大阪が好きになった。そのうちに行くから、その時はよろしく…」って手紙をくれた。「まかして下さい。その時が来たら石川大会の選手達にも連絡をして、同窓会を開くつもりでいるから…」と僕は返事を書いた。

大阪に来る日を楽しみに待っている…

出迎えにも行こうと思っているからね！

ナンペイの ひとこと＆ふたこと ⑰

＊反省＊

外出から帰ると妻が、

「冨田さんから電話があったわよ。サロン誌の原稿のことらしいけど……」

「原稿のこと？　こないだ書いたとこやのに、まさかもう次の催促かな……」

そんなことはないと思いながらも、いつも締切り間際にならないと原稿が書けない、という悲しい習性とそこから来る強迫観念からつい「サロン誌の原稿」と聞くと、＜原稿の催促＞という言葉が頭のなかをうろつきはじめる。なんとも始末に悪い状況なのだ。

取り敢えず着替えをするやら、お茶を一杯飲むやらして気を落ちつけて冨田さんのお宅に電話をする。

「あら、南光さん！　お元気ですか。」

いつもの優しい声が聞こえ、ほっとしたのも束の間だった。

「実は、サロン誌の朗読テープをボランティアさんに頼みに行こうと思うんだけど、人の名前とかで読めない所があるから教えてもらえます？」

「あぁっ、そうやった、しまった」

思わずそう言ってしまった。

サロン誌を、目の不自由な方たちにも読んで貰えるようにと、ボランティアの人にお願いして朗読テープをつくり、多くの人達に利用して頂いていることは勿論知っている。そして、その朗読テープを吹き込む作業がどれほど大変なことかも『話し』としてはしっていた。

それがどうだろう。こうやってもう二年以上もサロン誌に文章を書かせて貰っていたのに、ワープロにむかって自分の文章をポチポチと打っている時には、目の不自由な方のことも朗読ボランティアの人のことも、すっかり忘れてしまっていた。そんなことはお構いなしに自分勝手な文章を綴っていて、正直、自分の考えなり思いなりを読者に伝えることが多少ともできたかな、と思えるものも一つぐらいはある、と思っていた。しかし、今回冨田さんから頂いた電話で、一人よがりで自分がいかに思い上がっていたかを教えられたような気がする。

文章に限らず、他人に自分の意思を正しく伝えるということは非常にむづかしい。あるいは不可能だといってもいいかも知れない。しかし、それを避けては生きていけない。一対一であってもそうだろうが、サロン誌のような不特定多数を対象とする場合は尚更である。どのような立場の人にも分かって貰えるような努力が必要になる。

「もう、ええかげんにやめろ！」

という声が掛からぬ限り、この「ひとこと＆ふたこと」は続けさせてもらおうと思っているが、誰にでも分かってもらえる文章を書いていきたい。少なくともその努力は続けていかなければと思っている。

年の始めにあたってのナンペイの「反省」の弁である。

南光　龍平

Volunteer Center 9

八　ボランティアセンターの機能

今回からはボランティアセンター（ＶＣ）の機能について検討したい。ＶＣのさまざまな機能をみることによって、民間団体、社協、行政などがそれぞれどのような役割を分担していけるかを考えてみたいと思う。

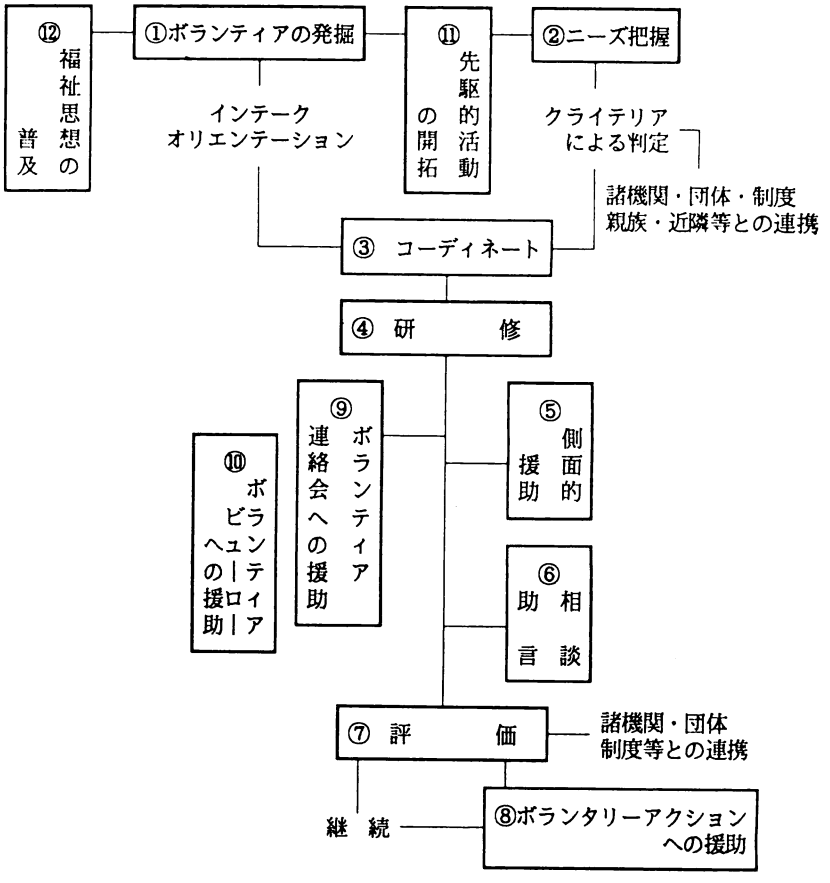
さて、一口にＶＣといっても、規模でみても全国的な組織や都道府県などに設置された「広域」のＶＣと市区町村に設置された「狭域」のＶＣがあり、それぞれ異なった機能を持っている。大阪市などの指定都市の場合は広域的な性格が強いが、区単位のＶＣが必ずしも十分ではないところでは、狭域的な性格も持っていると考えられる。

広域のＶＣは、広域的な活動を行うボランティアへの援助も行うが狭域ＶＣの活動に対する支援が重要な仕事である。これに対して、ボランティアに直接の援助を行うのは狭域の市区町村ＶＣの主な役割であり、ここではボランティアにより身近な市区町村のＶＣの機能を中心に検討する。

市区町村ＶＣの機能をボランティア活動の流れに沿って整理したひとつの考え方として図にまとめてみた。次回からこの図をもとに話をすすめたい。

原田　仁

《ボランティアセンターの機能》



波とその広がり

もう十年ほど前になる。そのころぼくは新聞配達員として生活費と学費を稼ぐ毎日をすごしていた。

朝刊を配りおわると、朝日はもうビルの上から白い光を投げかけている。空になった自転車の荷台を鼻歌まじりに軽く叩きながら、ぼくは店に帰ろうとした。

そして、ふと道路の向かい側を見ると、まだ人影のない歩道を長身の若い女性が歩いている。白い杖を片手にもち黒いグラスをかけ、長いまっすぐな髪は腰のあたりまで垂れている。あざやかな原色のロングスカートに隠されたその足は、ほとんど迷いもなく動かされているように見えた。

通勤の途上であろうか、彼女の白い杖は生きている時計の振子のようにアスファルトの道を刻み、前へ前へと進んでいく彼女の足もとを静めていく。

このような女性の姿を見るのは、ぼくは初めてであり驚きとともに感動を覚えた。きっとこんなにも堂々と早朝の道を歩くまでには、いろいろな苦労があったのだろうと思うと、働きながら勉強するという自分の生活も励まされたように感じたのである。

あの女性がどういう人で何をしていた人なのか、ぼくはいまでも全く知らないのだが、彼女の軽やかな足どりは目に残っている。ひとつのイメージとして新鮮なまま十年たっても生きているのである。

あの人は、このことを知っているのだろうか。もちろん道ですれちがっただけのことであるから知っているはずもないのだが、自分の歩みがもっている意味には気づいていたのだろうか。

ひとがひとに影響をおよぼすとき、本当はこういう仕方が多いのではないか。影響を与えようと思って行なわれた行為は、まったく意図したものとは別の結果をまねくかもしれない。ひとを励まし生きることの価値を伝えるような行為は、実は横顔のような生きる姿に現れるのではないか。

誰が自分の行為の波及を知ることができるだろう。白い杖をもち誇らしげに歩いていたあの女性は、自分の歩く姿が一人の働く学生を勇気づけたなどと想像したこともないだろう。そしてぼく以外のどれほどの人たちを元気づけたか、それは地上の誰一人として知る者はいないのである。

だから自分で自分の値打ちを知ることができるなんて妄想にすぎない。誰だって自分が他の人にどんな影響を与えているのか、本当は少しも知ってはいないのだ。

ひとは互いの「生き方」を見つめあって生きている。勇気をもった生き方も不誠実な生き方も、道ゆく人に見つめられ、池に投げこまれた小石のように、それ自身は見えなくなっても波は果てしなく広がっていく。人からの波は受けても、自分が与えた波の意味を追うことはできない。

ひとは、自分の重みと、そこから輪のように広がる波の届くかなたの岸の場所を知ることはない。波はもはや誰の波とも知られないままに視野を越え時をこえて、岩かげの片隅さえもおおっていくのである。

（知）

知らされない愛について

此の度、大阪ボランティア協会・出版部より、ボランティア・テキストシリーズの一つとして岡　知史氏のエッセー集「知らされない愛について」が発行されました。

このエッセー集は「サロン・あべの」紙に毎月連載されていた氏のエッセーと、他紙に寄稿されていたものの中から抜粋された文章が納められています。イラストは、サロン紙でお馴染みの石田美禰子さん。

毎月、サロン紙で親しんできた「（知）氏の文章」ですが、このようにまとめられた本に接しますと、氏のお人柄が一層温かく感じられて、折りにふれ何時でも手に出来る座右の書にしておきたい一冊ではないかと思います。皆様のお手元にもぜひ。

＊「知らされない愛について」

頒価　七〇〇円

著　者　岡　知　史

イラスト　石田　美禰子

発　行　ボランティア協会・出版部

〒〇六－三五七－五七四一（代）

FAX　〇六－三五八－二八九二

岡知史氏のエッセー集「知らされない愛について」を読んで

斉藤孝文

此の度、おもいがけなく岡　知史氏のエッセー集を手にする機会を得て、感激しています。サロン紙に掲載されていた時は、何の気なしに読ませていただいていましたが、今こうして一冊の本となり、改めて心をこめて念入りに読ませていただくと素晴らしい内容計りで、時間も忘れて読みふけってしまいました。カットの絵も素晴らしく石田様の奥様の才能にも改めて感服した次第です。

手元に置いて何度も繰り返し愛読いたしたく、それを又楽しみにしております。

おしらせ

二月の出会い

日時　二月十五日（土）午後一時～四時

場所　育徳コミュニティーセンター二階研修室（スロープ車椅子トイレ有）

［阿倍野区阪南町五－十五－二八］

内容　「車椅子でちょっとおでかけ」（ビデオ）

会費　なし

問い合わせ　TEL・06-691-1028（冨田慶子）

＃感謝します＃

カンパ・お茶菓子・果物・メモ帳・新年度用日めくり・冊子等ありがとうございました。お礼を申し上げます。

十二月のカンパ　金五七、五〇〇円

石田　律、石原　栄、今西美奈子、上田　敏、植松菊雄、大塚一枝、岡　賀寿子、小川　哲、金子花江、北原喜久、木村圭子、斉藤孝文、坂井柾子、崎本ヒサエ、滝本涼子、竹内新作、田辺さかえ、林　三起子、東谷和代、松本　孝、山本敏子、匿名四名様

（敬称略）

美智子のこんな話

岸田　美智子

スウェーデンからの手紙に思う……

初めての海外旅行で、福祉先進国のスウェーデンとフィンランドへ行った日から早いもので、もう八ヵ月が過ぎてしまいました。この旅行の事は、この「サロン・あべの」にも詳しく書かせていただきました。

そして、今でも日本から一緒に行った人達やホームステイ先の一家とは、電話でギァーギァーしゃべったり、文通もしています。スウェーデンからのお便りをいただく度に、頭の中に懐かしいスウェーデンのとても豊かな自然の風景やスティーン家の様子などが、大変懐かしく思い出されます。

きっと、いつまでも忘れられない良き思い出になると思います。

ところで、このスウェーデンからの手紙を受け取る度に、感じる事があります。

それは、内容も勿論、勉強になりますが、その便せんの使い方が違うのです。毎回、どんな便せんでも裏表にビッシリと書いてあるのです。

私が十日間暮していた時も、日本にはどこにでもある真っ白なティッシュペーパーなど見掛けませんでした。台所などで見掛けたのは、ほんとに質の悪そうな濃いグレーのザラザラした紙でした。

こんな紙の使い方一つでも、私達日本人が、身に付けてしまった《ぜい沢な暮し》が丸見えになり、改めてはずかしいなぁと思います。

この日本では、便せん一枚なんて失礼だから、何も書いてない便せんを、わざわざもう一枚付けて出す事も多いし、ましてや、裏表両面使えるようになっている、便せんを見付けるのは難しいと思います。

福祉先進国の文化を、これからもこの文通で、一つでも多く知っていこうと思っています。

編集後記

先月の墨字訳についておたずねがありました。

点字に対する墨字で、目の不自由な人が読めるように点字に訳すのを点訳、逆に点字で書かれた文章を文字に直すのが墨字訳です。先月の馬越郁栄さんの原稿は、点字で寄せられたのを文字つまり墨字に直したものです。

（石）

編集人；サロン・あべの運営委員会・＜サロン・あべの＞NO.67［'92. 1.18 発行］定価￥１００．
代表；冨田慶子〒545 大阪市阿倍野区阪南町６－３－２６．電話０６－６９１－１０２８
表題；斉藤孝文・筆
印刷；セルフ社〒545 大阪市阿倍野区西田辺町２－２－１０－１０１．TEL.06-691-2365.

発行人；関西障害者定期刊行物協会［大阪市城東区東中浜２－１０－１３緑橋グリーンハイツ１Ｆ］

毎月十二回（二・四・六・八の日）発行　一九九一年九月三日第三種郵便物認可